

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 20 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520911

研究課題名(和文)現代インドにおける都市村落混住地域とグローバルネットワーク - 社会空間の視点から

研究課題名(英文)Rurban Areas and Glocal Networks in Contemporary India: Perspectives from Ideas of Social Space

## 研究代表者

常田 夕美子 (Yumiko, Tokita)

大阪大学・グローバルコラボレーションセンター・特任准教授

研究者番号：30452444

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、現代インドにおいて急激に増えている「都市村落混住地域」(rurban、以下ラーバン)において、都市的な自律的モビリティと村落的な共同態的關係を接合した、新たな社会実践と空間構成のパターンがつくられる過程を明らかにした。ラーバンは、村落・都市・海外の間を循環する人、モノ、カネ、情報の動きを接合し、多元的な社会集団が混住する場であり、現代インドの社会的動態を探究するのに最適のフィールドである。本研究では、異質なものを媒介する<社会空間>という視点から、ラーバンにおける人とモノの配置秩序の構築過程を分析することによって、現代インドのグローバル化の動きを理解することを試みた。

研究成果の概要(英文)：The present research examined the emergence of new patterns of social practice and spatial configurations in rapidly increasing rurban areas in contemporary India. Rurban is an area in between the rural and the urban that links villages, towns, cities and overseas, and enables the circulation of people, things, money and information between these diverse areas. It is also a place where a variety of people of different classes and castes reside. I employed the analytical perspective of social space to explore how people and things were located and given new meanings in processes of glocalization in India today.

研究分野：文化人類学

キーワード：インド グローバリゼーション ラーバン 社会変化 親密ネットワーク ケア 女性 社会空間

## 1. 研究開始当初の背景

現代インドの動態を理解するためには、村落と都市の関係の再編過程を検討することが重要である。従来の研究では、村落と都市の対比を前提として議論されてきた。村落は伝統が維持される共同体のしがらみが強い場所として、都市は近代的な発展や自由を可能にする場としてとらえられ、村落から都市への急激な移住が注目されてきた [Parry 2003]。さらに、経済成長にともない、都市と村落の間に格差が拡大しているという問題も指摘されてきた。

しかし、インドの都市化のペースは、世界の他の地域と比較すればゆっくりとしており、都市人口比率は、現在の約 30% (世界全体は 50%) から、2050 年においても約 50% (世界全体は 69%) にとどまると予測されていた [United Nations 2010]。また、グローバル化する世界を分析するためには、村落/都市という二分法には限界があった。

そうした背景のなかで、現代インドで注目すべきは、村落と都市の間をつないで急速に広がっている「都市村落混住地域」(rurban、以下ラーバン)であり、その発展にともなう村落と都市の関係の変容、および多層的な社会集団の混住状況である。

現代インドの村落/都市関係の再編に関する研究において、地理学や建築学は、地域構造や人口分布の分析から空間変容に着目し [澤 2010]、人類学や社会学は、家族、親族、ジェンダー、カースト、宗教コミュニティの再編成にもとづく社会関係の変容 [Seymour 1999] に注意を向けてきた。

しかし、近年の研究では、さまざまな新たな社会関係が、人びとの空間的な相互作用をつうじて構築されるということが注目されている [De Neve & Donner 2006]。つまり、空間の再編と社会関係の変容は切り離すことができないもので、両者を総合的に検討することが必要である。

私は、これまで、現代インドにおける家族・親族ネットワークの再編成を検討してきた。そこで明らかになったのは、人・モノ・カネ・情報という「物質=記号」[Marriott & Inden 1977] を密接にやりとりするなかで、個人の身体が家族・親族と親密につながったままで、自由に移動することが可能になっているということである。物質=記号の共有によって広がっていく親密ネットワークは、現代インドにおいて、村落、都市、海外という多様な場所をリンクし、人やモノの移動という社会経済的動態の基盤となっている。さらに、昨今のフィールドワークから、こうした親密ネットワークを空間的に支える場としてラーバンが重要であることも分かってきた。

現代インドのラーバンは、都市と村落を空間的にも価値的にも媒介するだけでなく、複数の親密ネットワークが交差し、多層的な社会集団が混住する地域である。カースト、宗教、

階層などの異なる人びとが、共に住むための日常的な社会秩序を構築する過程は、空間構造あるいは人間関係のどちらかだけをみていても分からない。新たな社会実践とネットワークのパターンは、その場その場の人とモノの配置と相互作用をつうじた「物質=記号」の交換と分離のなかで不断につくられていく。

そこで本研究では、<社会空間>という観点から、現代インドにおけるラーバンを描写・分析しようと試みた。社会空間とは「人々の生きる生活の現場において、異質なものが共存する」場であり、身体を介した日常実践の場である [西井・田辺 2006: 1-2]。本研究では、村落、都市、海外の間を循環する人、モノ、カネ、情報の動きが、ラーバンという新しい社会空間を形成している様子に注目し、そこで混住する多層的な社会集団の共生と対立の諸相を明らかにするなかで、現代インドにおけるグローバル化の動態を解明しようとした。

## <引用文献>

De Neve, G & H. Donner, 2006 *The Meaning of the Local: Politics of Place in Urban India*, Routledge

Marriott, M. & R. Inden 1977 "Toward an Ethnology of South Asian Caste Systems", in K. David (ed.) *The New Wind: Changing Identities in South Asia*, Mouton

Parry, J. 2003 "Nehru's Dream and the Village 'Waiting Room'" *Contributions to Indian Sociology* 37 (1-2)

Seymour, S. 1999 *Women, Family, and Child Care in India: A World in Transition*, Cambridge U.P.

United Nations, 2010 *World Urbanization Prospects: The 2009 Revision*

澤宗則, 2010 「グローバル経済下のインドにおける空間の再編成」『人文地理』62(2)

西井涼子・田辺繁治編, 2006 『社会空間の人類学: マテリアリティ、主体、モダニティ』

世界思想社

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、現代インドにおいて急激に増えているラーバンにおいて、都市的な自律的モビリティと村落的な共同態的关系を接合した、新たな社会実践と空間構成のパターンがつくられる過程を明らかにすることである。ラーバンは、村落・都市・海外の間を循環する人、モノ、カネ、情報の動きを接合し、多層的な社会集団が混住する場であり、現代インドの社会的動態を探究するのに最適のフィールドである。本研究では、異質なものを媒介する<社会空間>という視点から、ラーバンにおける人とのモノの配置秩序の構築過程を分析することによって、現代インドのグローバル化の動きを理解することを試みた。

### 3. 研究の方法

本研究は、日本での文献研究および現地（インド・オディシャ州）でのフィールドワークをつうじて行った。現地調査では、(1) ラーバン形成の空間史、(2) ラーバンにおいて混住する多元的社会集団の共生と対立の諸相、そして、(3) 社会空間としてのラーバンを拠点とした都市と村落をつなぐグローバルネットワークの動態を明らかにするために、調査地域の空間史マッピングをし、ラーバン在住のさまざまなカースト、階層、ジェンダー、年齢の人びとへのインタビューと参与観察を行い、ラーバンを中心とした人、モノ、情報のネットワークを村落から都市まで追うことによって、調査を進めた。

### 4. 研究成果

#### (1) ラーバン形成の空間史

ラーバン形成の空間史としては、オディシャ州クルダー町（人口約 42,530 人）周辺の P 村（人口約 4,158 人）K 地区の例が挙げられる。K 地区には、様々なカーストや階級の人びとが混住するが、まずは、当地域にあった農村のもともとの居住者で、その土地を所有する多様なカースト集団がある。その後、1980 年代に投資目的および老後の住居用に町の周辺に土地を購入、1990 年代に住宅を建設し、2000 年代以降第二の人生をそこで過ごす中間層退職者たちが移住している。次には、1990 年代後半から 2000 年初頭に、当該地域に生まれ育った世代が、P 村に土地を購入し、住宅を建設し、住むようになった。理由は両親の近くに住めるということと、州都ブバネーシュワルなどへの通勤の利便性のためである。さらに、同地域の借家に住み、中間層世帯の家事労働を担う農村出身の貧困層が居住している。

#### (2) ラーバンにおいて混住する多元的社会集団の共生と対立の諸相

ラーバンは農村と都市を空間的にも価値的にも媒介する。ラーバン住民たち自身もそこは農村でも都市でもないような中間的な性格を持つと認識している。

ラーバンは農村的要素と都市的要素が混交する場であるからこそ、その住民は農村共同体にあるようなカースト差別に直面せず、すむ一方、都会の無関与・無関心による孤立感を味あわなくても生活ができ、互いに適度な距離感を保ちながら暮らしていける。

もちろん近所づきあいはカーストや階層の差異によって選択的になされているが、当地域に昔から住んでいる指定部族民の藁ぶき屋根の家と上位カースト中間層の新築豪邸とが同じ通りに並んでいる光景は、農村ではまず見られないし、都市の住宅街でもないものだろう。ここでのラーバンは高層集合住宅が林立する郊外ニュータウン、周辺地域から隔離されたゲートド・コミュニティ、旧

来の集落が開発から取り残されるアーバン・ビレッジとは異なる。

とはいえ、ラーバンにおける社会関係や住宅空間配置に問題がないわけではない。ラーバンには多様なカーストや階層の人々が隣接し住んでいるが、1980 年代以降にその土地を購入した中間層と土地を売却した下層・指定部族民の間には、緊張感、相互不信、腹の探り合いがあり、あまりうちとけた関係でないことは確かである。

#### (3) 社会空間としてのラーバンを拠点とした都市と村落をつなぐグローバルネットワークの動態

現代インドのラーバンは、都市的な個性・自律性・移動性・目的合理性と、村落的な共同性・関係性・定住性・相互扶助・アイデンティティという異質な要素が絡まり合っ、それらを媒介し双方を可能にするような新しい生活文化がつけられつつある場である。さらにそこは、カースト、宗教、階層の異なる社会集団が混住し、新たな日常的な交流をもつ場でもある。

本研究では、ラーバンを村落と都市をつなぐ混住的な社会空間として位置づけることにより、いかに異質な関係性や価値が相互作用しながら、新たな人とモノの日常実践の秩序が構築されているかを明らかにした。現代インドにおけるグローバル化の過程は、同質的な規範を共有していくのではなく、異質なものが異質なるままに、相互関係のなかに共存していくすべを構築していく過程である。そうした秩序構築のためには、日常実践を組織していく場所が必要であり、ラーバンとはまさにそうした現場である。

ラーバンにおいて興味深いのは、男系親族集団の原則だけでなく血縁関係自体にもとられない日常的なケア関係が構築されていることである。そこでは都市的な自律的モビリティと農村的な共同態の関係を接合した、新たな社会実践がみられる。ラーバンの中間層退職者たちは子供たちの世話にはなりたくないと言主張し、都市で働いている息子たちが彼ら呼び寄せようと思ってもそれに応じない場合がよくある。老人が一人暮らしをするために、近所に住む未亡人や「出戻り」などを含む貧困者を家事労働者として雇い、互いが家族のように振舞っているケースもある。そこでは社会的弱者を含む相互的な新たなケアの関係が作られている。

現在、ラーバン P 村 K 地区において展開している新たなケア関係の形態が可能なのは、そこが 1980 年代以降、比較的緩やかに発展しつつある住宅空間であり、大型マンション建設などの建設ラッシュがなく、急激な都市化がおこっていないからだと思われる。住宅街の規模も小さく誰がどこに住んでいるかほぼ皆が把握している。また現在の住民は当地区に家を建てた人たちからせいぜい三世代までで、農村のように何世代にもわたる複

雑な家族・親族、カースト間関係に日常的には煩わされない。

つまりラーバンは社会的にも空間的にも農村と都市のどちらにも属さない地帯であり、多様な人々が農村的な社会構造からはある程度自由な立場で、しかし都市における非人格的で代替可能な属性に還元されず、自他の人格的な固有性を維持・尊重しながら共在できる場なのである。

そのような状況は特殊であり普遍化できないかもしれないが、少なくともこの地域では農村の共同性と都市の選択可能性のそれぞれのよい側面を用いて新たな関係性を構築しようとする人々の営みが見られる。

従来の研究が、グローバル化と都市化により村落社会の重要性が一方的に低下すると考えてきたのに対して、本研究では、ラーバンという新たな社会空間が、村落と都市のあいだの、人、モノ、カネ、情報の循環を社会的・空間的に支えていることに注目した。これは、現代インドにおけるグローバルネットワークの諸相 村落と都市の連続的媒介を明らかにし、そこでの多元的社会集団の具体的で日常的な関係秩序を解明することができた。

また、従来の現代社会論がしばしば個人化・情報化・都市化・脱場所化[オジェ 2002]を強調するのに対して、今日の社会経済動態を支えるラーバンにおいて、人、モノ、場所の不断の再配置と再埋め込みによる日常秩序の形成過程が重要であることを指摘し、それをグローバル化の過程としてとらえることは独創的であった。本研究は、近年のネットワーク論や空間・場所論などの新たな発展をとりこむことにより、現代インド経済の興隆を支える社会空間的基盤について、人類学の立場から新たな知見をもたらすことになったと思われる。

#### <引用文献>

オジェ, マルク 2002 『同時代世界の人類学』 藤原書店

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### [雑誌論文](計 5件)

常田夕美子、「第2章 空間の再編と社会関係の変容 農村、都市、海外をつなぐ親密ネットワーク」三尾稔・杉本良男編『現代インド6 環流する文化と宗教』、東京大学出版会、査読無、2015年、pp. 51-72.

常田夕美子、「第6章 赤ちゃん工場、賃貸用の子宮 インドにおける代理出産をめぐる」檜垣立哉編『バイオサイエンス時代から考える人間の未来』勁草書房、査読無、2015年、pp. 147-177.

Yumiko TOKITA-TANABE and Akio TANABE, 'Politics of Relations and the Emergence of Vernacular Public Arena: Global Networks of Development and Livelihood in Odisha', in T.A. Neyazi, A. Tanabe and S. Ishizaka eds, *Democratic Transformation and the Vernacular Public Arena in India*, Routledge, 査読有, 2014年, pp. 25-44.

常田夕美子「新刊紹介 ウマ・ナーラーヤン著『文化を転位させる アイデンティティ・伝統・第三世界フェミニズム』塩原良和監訳、川端浩平・富澤かな・濱野健・山内由理子訳法政大学出版社」、『ジェンダー史学』第8号、査読無、2012年、pp.136-137.

Yumiko TOKITA-TANABE, 'Play and Poetics in Raja Festival', in H. Kulke, N. Mohanty, G. Dash and D. Pathy eds, *Imagining Odisha, volume II*, Prafulla, 査読無, 2013年, pp.6-7.

#### [学会発表](計 6件)

Yumiko TOKITA-TANABE, 'Beyond the "Baby Factory": Construction of Intimacy in Commercial Surrogacy Practices in India', *Intimate Lives of Intimate Laborers, A Workshop. Session 2 Mother-child intimacy in transition*, 2015年3月1日, 早稲田大学.

常田夕美子、「インド・オディシャ州における村落女性のライフヒストリー」,「生活世界の変容とジェンダー: インド高齢女性のライフヒストリーを通して」研究会、2014年11月3日、神田学士会館京大事務所.

Yumiko TOKITA-TANABE, 'Transformation of Anthropological Studies of South Asia in Japan from the Post-war Years to the Present', *International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress*, 2014年5月18日、幕張メッセ.

Yumiko TOKITA-TANABE, "Substance-code, Body-person and Social Relations in India", *11th World Congress of Semiotics*, 2012年10月7日、中国 Nanjing Normal University.

常田夕美子、「ポストコロニアル状況における女性の行為主体性 村と都市の対比」人間文化研究機構地域研究推進事業『現代インド地域研究』現代インド・南アジアセミナー、2012

年9月23日、国立民族学博物館。  
Yumiko TOKITA-TANABE and Akio  
TANABE, 'Politics of Relations:  
Glocal Networks of Development and  
Livelihood in Odisha',  
International conference on  
'Discussing Contemporary India:  
Politics and International  
Relations from Asian and Global  
Perspectives', 2012年6月, 京都  
大学。

〔その他〕

ホームページ

<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/staff/tokita/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

常田 夕美子 (TOKITA Yumiko)

大阪大学・グローバルコラボレーション  
センター・特任准教授

研究者番号：30452444